

がん患者の生きる力を高める、「キレイの力」プロジェクト 10周年記念交流会を開催

看護×NPO×企業の連携によるがん患者支援

看護学生によるヘア・ドネーション

看護学生がドネーション（寄付）した頭髮を使って医療用ウィッグ（かつら）を作り、がん治療中の女性に贈る、「キレイの力」プロジェクトをご存じでしょうか。

NPO 法人キャンサーリボンズと、ヘアケア関連企業の P & G パンテーン、ウィッグメーカーのスヴェンソンが共同で主催する同プロジェクトの 10 周年記念交流会が、2018 年 11 月 28 日（水）に東京・四谷で開催されました。

同プロジェクトは、P&G パンテーンが欧米で行っていた活動がベースとなっています。欧米では頭髮の寄付を広く一般から募っていましたが、日本では、看護学生から寄付を募るかたちで運営しています。この日本版のアイデアは、プロジェクト実行委員長の佐藤禮子氏（東京通信大学、元・日本がん看護学会理事長）らのアドバイスにより発案されました。参加する看護学生は半年間ヘアケアをしながら頭髮を伸ばし、それを寄付しています。

交流会には看護職も参加

交流会には佐藤実行委員長をはじめ同プロジェクトに参画した複数の看護職が参加。

伊藤泉氏（聖マリアンナ医科大学看護専門学校校長）は、「学生たちはプロジェクトを通じて、がん治療による脱毛などの副作用が患者さんに及ぼす生活や仕事への影響などを感じることができている」と語りました。また、2017、2018 年にウィッグ贈呈病院として参加した、がん研究会有明病院、副院長・看護部長の清水多嘉子氏は、「ウィッグを贈られたがん患者さんは『うれしい』という喜びを感じている。つらい治療を経験しながらも、少しでも患者さんが前向きになれるよう、さまざまなサポートをしたい」と語りました。

さらに、ウィッグを贈呈されたサバイバーからは「治療の副作用で脱毛が全身に起こり、それまで当たり前だった日常生活を送ることの難しさを感じた。そのような中、毎日身に付けるウィッグを通じて看護学生さんたちの応援の気持ちを感じながら生活できた」という言葉が聞かれました。

このように、ウィッグなどを通じたアピランス（外見）のケアは、社会生活や家族との関係性を支えることにもつながるのです。

その後、参加者全員でがんサバイバー支援の体制づくりなどについてディスカッションし、今後の同プロジェクトへの期待を共有して、交流会は幕を閉じました。

＊

NPO 法人キャンサーリボンズでは、学生によるヘア・ドネーションへの看護専門学校・看護学部への参加（毎年 10 校程度）や、患者支援活動に向けた寄付などの支援を募っています。興味のある方は、事務局（ribbonz@ellesnet.co.jp）までお問い合わせください。



写真1 山崎多賀子氏（がんサバイバー、美容ジャーナリスト）によるメイクアップ講座



写真2 参加者全員の集合写真。前列左端は NPO 理事長で乳腺外科医の中村清吾医師